

『榻嶋暁筆』の表現

——『撰集抄』との関係から——

小 椋 愛 子

一、はじめに

『榻嶋暁筆』は、約三五〇篇の説話をおさめ、一種の類書・雜纂的な説話集といわれ、^(注)その内容、分野は実に多様である。しかし、各説話の受容・編纂の方法、形式（別記形式を用いるなど）に独自性はあるものの、説話自体の内容としては大部分が、何らかの典拠を有すると思われる。しかし、次章でみるように、典拠に関する指摘は数少ない。

本稿では、説話評論と言われる『撰集抄』の表現と類似した箇所をいくつか指摘したい。また、受容の方法は、典拠とする作品によって異なるが、『撰集抄』からの場合、説話自体より、評の部分からの受容が目立つ。『榻嶋暁筆』の受容の方法の特徴を検討し、そこから『榻嶋暁筆』の姿勢についても考えてみたい。

二、『榻嶋暁筆』の出典研究史について

まず、「榻鳴暁筆」の出典を扱う論文について、まとめておきたい。「榻鳴暁筆」の出典研究は、多くない。年代順にみていくと、

市古貞次氏「榻鳴暁筆」翻刻の解説・頭注、

石川透氏「榻鳴暁筆」の在原業平記事（一九九三年・七月・「江戸川女子短期大学教員研修会会報」）、

黒田彰氏「劔巻覚書―土蜘蛛草子をめぐって―」（長谷川端氏編「太平記とその周辺」所収・新典社・平成六年、

黒田彰氏「中世説話の文学的環境・続」・笠間書院・平成七年再録）

安田孝子氏「後世における『撰集抄』受容」（安田孝子氏「説話文学の研究 撰集抄・唐物語・沙石集」和泉書院

などである。

一九九七年二月）

石川氏は、「榻鳴暁筆」の「在原業平」の記事が「玉伝深秘巻」と類似していることを指摘し、さらに「玉伝深秘巻」の異本である「金玉双義」の記述の方が「榻鳴暁筆」の記事に近いとする。又、市古氏の頭注にもあるように後半のある部分は「無名抄」に拠り、なかでも阿波国文庫旧蔵東京大学付属図書館蔵本と源直頼書写臨写内閣文庫蔵本が近いと指摘する。そして、「榻鳴暁筆」の「業平は聖観音の化身……」などは、「室町物語」や中世「伊勢物語」注釈書の「和歌知頭集」などにも記され、「文学分野を越えた、いかにも中世的記述である」とする。「榻鳴暁筆」の記事を中世古注釈類との関係の中で論じている。

黒田氏の論文は、「劔巻」と注釈書類との関係を論じたもので、「榻鳴暁筆」が中心ではないが、論の中で一部「榻鳴暁筆」との関わりを指摘し、「劔巻」のような半ば独立した作品は、位置付けが難しいとしつつも、その特徴は中世の世界において格段珍しいものではないとし、「劔巻」の注釈的側面を中心に論じている。ちなみに「榻鳴暁筆」と関連ある箇所をあげると、「劔巻」の『刀劔札讀序』と「和漢朗詠集」の注釈書の記事の説をあげる中で、同じような説が「榻鳴暁

筆」一六・五にあることを指摘し、又、蜘蛛切譚の生成を考えるうえで土蜘蛛退治譚（覚一本『平家物語』卷五「朝敵揃」や『太平記』卷十「日本朝敵事」等）の異伝として「楊鳴暁筆」十六・一があり、さらに、それとよく似た話が『太平記』卷三十二「鬼丸鬼切事」にあり（「異伝と見做得る」とする）、この話も「楊鳴暁筆」十六中に採られると指摘する。

両氏とも注釈書類との関連を指摘し、ここからもその出典から「楊鳴暁筆」が説話集のみならず、広範な分野に関わりを持つことがわかる。ちなみに、拙稿で「楊鳴暁筆」卷十（似類下）第二十九「延喜帝」の記事が、他の「日藏上人蘇生譚」に比べ、「平家打聞」と類似することを述べたが、このこともこれらの問題と重なってくると思われる。^{（注2）}

安田氏は、様々な箇所「撰集抄」の受容をあげの中で、「楊鳴暁筆」卷九「瞻西上人化女」が、「撰集抄」卷三「第七話「瞻西上人施女衣」から「概略意を取り記述したと考えられる」と指摘している。又、「楊鳴暁筆」同巻の「江口長者」と題する性空上人説話は「撰集抄」卷六「第一〇話「性空上人事」に関連するものの、「三國伝記」板本の系統に一層類似しており、この話は「撰集抄」からの直接引用とは考えられない」とする。

三、「撰集抄」との類似の表現

「撰集抄」の表現と関連のある箇所を、いくつか検討してみたい。「楊鳴暁筆」中、「撰集抄」から説話自体を引いているのは、安田氏が指摘された一話のみであるが、その他、説話自体でなく、評論部分の表現の類似はいくつかみられる。第三節では、「撰集抄」の評の部分と関わりのある次の四例を、第四節では「撰集抄」の説話自体を受容している「瞻西上人化女」の例を、その次話（漢土齋会化女）の後に付されている「別記文」（二字下げの箇所を指す。以下同）をも含めて検討したい。典拠からの受容の方法もパターンがある。まずは、典拠から、その大部分をほとんど手を加えずに採り入れている例からみていきたい。

1、卷二の第二「修樓婆王」

卷二の第二「修樓婆王」で、「撰集抄」から採っているのは、「別記文」の箇所である。この箇所は、管見に入ったどの諸本も、別記扱いになっている箇所である。これが、「撰集抄」巻一・第四「七条皇后 長歌」の話末評の部分とほぼ同文である。^(注3)^(注4)

【楊鳴暁筆】卷一・第二「修樓婆王」

^A是は賢惠經の説也。誠に妻子珍宝及王位、臨命終時不隨身とて、三途のちまた中有の旅には妻子珍宝身にそはざるのみならず、還て悪趣にたゞよふ中^aだちとなりなかし。されば此事まほろしのしばしの程の愛着なく菩提のとざしとならん心^bうさを思ひとり給へるにや。只戒及施不放逸今世後世為律^(注5)侶とて、冥途中有の悪道には、戒施不放逸のみこそ身をたすくなれ。しかじ、はやく愛着^dのきづなをきり、戒施の福をたくはへんには、と思召しり給ける。御こ、ろのかしこさは、たとへていはむ方なし。

【撰集抄】卷一・第四「七条皇后 長歌」

………実に、妻子珍宝及王位、臨命終時不隨身とて、三途のちまた中有の旅には、妻子珍宝身にそはざるのみならず、帰て悪趣にたゞよふ物也^a。されば、此まほろしの、しばしのほどの愛着、ながく菩提の戸^bざしたらん、心愛に非ずや。唯戒及施不放逸 今世後世為伴侶とて、冥途の悪みちには、戒施不放逸のみこそ、身をばたすくなれ。しかじ、早恩愛^dをふりすて戒施の功德をたくわへん、と思侍れど、年をへて思なれにし事の、難忍て、ま、とすぐすに侍り。然るに、此三位の、俄に発心して勤給けん、浦山しきには非ずや。道心のさめ給はざりければこそ、亦も見え給はざりけめ、と責く覺侍り。さても往生の素懷を遂給なは、最初引接の人には、伊勢のみにてこそ侍らめと、すゝろにあはれに侍り。

比較してみるとA・B部分は、独自の文である。大部分が典拠を持つものの「修樓婆王」を末尾で称讚し、「本文」にあうようにまとめていることがわかる。依拠部分では、傍線部分が異なるが、cは漢字の意味自体は類似、dも、「恩愛」は、仏教で説く消極的な恩の一つで、断ち切らないとならない親子、夫婦の愛を示し、「愛着のきづな」とするものの意味は同じである。aでは「中だち」と修飾する。これは「撰集抄」では、妻子を完全に捨てるのに対し、「榻嶋暁筆」では、妻子を布施にさし出すものの、返されて戻ってきて、「つつがなく暮らした」とするため、妻子を「悪趣にたゞよふ物」と断定できず「中だち」としたのである。又、「榻嶋暁筆」では、「なりなんかし」「思ひとり給へるにや」など語り手の思いが反映されているのに対し、「撰集抄」の方が論説的な語りとなっている。但し、文意の違いはきわめて少ないといえる。「妻子珍宝及王位、臨命終時付隨身」や「戒施不放逸、今世後世為伴侶」の偈は広く人口に膾炙した語であり、他の作品、「宝物集」、「古事談」、「古今著聞集」、「往生要集」、「とはすがたり」などにもみられる。(注6)しかし、偈のみを用していることが多く、前後の文章までこのように、ほぼ同文であるのは「撰集抄」のみで、ここは、「撰集抄」に拠っていると見えよう。

【榻嶋暁筆】の「本文」(説話部分)の典拠は未詳である。この話は、「修樓婆王」が、実の道を求めるために、妻子までも夜叉(実は毘沙門天の化身)に食べられてしまうことがわかっていながらも捧げるといふ話である。「榻嶋暁筆」の「別記文」冒頭で「是は賢愚經の説也」とあるように、又、市古氏の頭注にもあるように「賢愚經」一、「梵天請法六事品第一」が原典である。しかし、原典から直接採ったとは考えにくく、又「此の世のあだなることを思召つらぬれば……種ものこらず、春の朝に花をながめ、秋の夕に月をうそぶくともがら……」など和語的な表現を多く用いていることから原典以外の何らかの典拠があると考えられる。しかし、この話は「撰集抄」にはない。「別記文」と「本文」はそれぞれ異なる典拠を持ち、それらをうまく組み合わせた形でこの一話は構成されている。

さて、「撰集抄」の「七条皇后 長歌」の説話は、七条の皇后が亡くなった為、ある人がその御所に仕えていた伊勢とい

う女房にお悔やみを申し上げたところ、その返事として伊勢が長歌「皇后が亡くなってからは、仕えていた人とも別れてしまい、御所にとどまるものといえ、穂の出た薄だけである。その穂が空に向かって手招いても、寄ることなく鳴き渡っていく初雁のように私も泣きながらよそから御所を眺めやることでしょうか」という内容のものゝを詠んだ。それを見ながら「国行の三位」が発心し、妻子をふりすてて出家し、姿を隠したという話で、出家した国行の三位を称讃する内容となっている。これは、「榻鳴暁筆」の「修樓婆王」の、実の道を求めるためには妻子をも布施にさし出す話と、趣旨を同じくする。「榻鳴暁筆」は、趣旨の似た説話の評を「別記文」として採り入れて、この話の解釈としている。「榻鳴暁筆」の「修樓婆王」は、説話と評（「本文」と「別記文」）にそれぞれ異なる典拠を持つものの、その組み合わせによって独自性を出し、従来にない一話を生み出しているといえる。

2、巻二の第五「阿育大王」

この例も、1の場合と同じく、部分的に「撰集抄」から採っている例である。しかし、1の「修樓婆王」の例と違い、「別記文」ではなく、「本文」中に「撰集抄」の評の部分を探り入れている。「本文」の典拠は、未詳である。但し、割注や、市古氏の頭注にあるとおり、「阿育王経」巻一（経律異相二四）や「西域記」とは重なる。この「阿育大王」の話は「阿育王」の悪行をも含めた諸行を記した後、この王が亡くなる直前、百億の金を賢聖に布施しようとしたが諸臣に戒められた為に、できなかつたことを記し、自分が未だ王であるのに、諸臣が王に奉った阿摩落果の実（それも半分が朽ちている）しか自由にならなかつたとして、嘆息しつつ、その半果を鶏園に送り衆僧に施し、供養としたとする。そのすぐ後に、「哀なる御事なり。……」と解釈・評と思われる部分が続く。この話は、話末に「別記文」がある。通常「別記文」になっている内容を見ると、特に話末にある場合、「本文」の解釈、評、感想などとなっていることが多く、普通なら、この「哀なる御事なり。……」から別記扱いになつても不自然ではない箇所である。しかし、諸本に、この部分を別

記扱いにしているものはない。

さて、「撰集抄」と関わるのは「哀れなる御事なり。」としたあと、前話四「頂生王」のことをもふまえた文の後、「返々心うく侍らずや」からである。

【楊鳴曉筆】卷二・五「阿育大王」

A
……哀なる御事なり。已上頂生侍奉經、西情なきは無常の殺鬼被記等に依てしるすなり

なり。高位高官を怖奉らず、威猛威勢をも用ず。されば彼

頂生王の世三天の雲の上に楽をえまししくし、此阿育王の

四極六合に自在におはせしも、みな此道をは過給はず。我

等又此道におもむき侍らん事、「返々心うく侍らずや。む

なしく北芒の露ときえぬる夕は、むつまじかりし妻子、さ

りがたかりし親子、アしばしにてもか、へやはつ。只いそぎ

野べにをくり、一片の煙となし、イゆふべの空をとぶらへば、

よこぎる雲もをそれかと計ながめ、朝に野べを尋れば、浅

茅が原の秋の風音すさまじく身にしてみて、たま／＼名残と

見ゆるは、形もなき白骨計也。しかあれば、我もはかなく

人もあだなるは此世なり。それにとはぬをうらみ、わかる、

を歎き、鳥かねのこゑをかこち、かりのやどりに思ひをま

し、長世アのつみをつくり侍ることは、あさましきには侍ら

【撰集抄】卷一・第六「越後上村見」

……はや、無常の鬼にとられ侍らんこと、「返々心憂侍り。

むなしく北ウ芒の露ときえぬる夕べは、むつまじかりし妻子、

難去かりし親子も、か、へもたんと云事や侍らん。たゞ急

ぎて野辺に送り、イ薪ニにつみて、一片の煙にたぐへては、空

しくよこぎる雲ばかりをうらみ、朝に行て別れし野辺をみ

れば、浅茅が原の秋風のみ身シに入て、僅に名残とみゆるは、

形もなき白骨也。

然ば、我もはかなき身、人も仇なる世也。其に思ひを染

て、とはぬまを、うらむらさきの藤の花、何とて松にか、

りウそめけるぞと、かりの身に恨を残し、あふことや泪の玉

ずや。たま／＼此身をうけ、まれ／＼仏の御法にあい奉る此生に、十二因縁、流転の環をきり、廿五有生死の縛をくりはてずは、いつの時をか期すべき。空しく今生をはせ過、悪趣におもむきなば、悔るとも益なかるべし。然に法灯青嵐に絶なば、長夜のやみも照しがたく、法水白浪にみなぎらば、生死の海もわたしがたかるべし。

などや法花経に、「如闇得灯、如渡得船」とかかれるをば信じ奉らざるをや。又「離一切苦、能解一切生死の縛」とかかれたれば、信すべきは此法也。貴べき妙法なり。

(*表中、点線で囲んだ「新につみて」の語は「阿育大王」に見られない語)

表では、評の内容が始まる箇所から全てをあげた。「撰集抄」と関わるのは、五行目(表中)を付した箇所)からで、先にも述べたとおり、「評」の初め(網掛けA)は、前話をも踏まえた形で独自の表現でまとめている。ア、イ、ウの部分は、典拠にはなく、付け加えているものだが、その違いはわずかで文意自体に影響はなく、全て依拠する表現によつて導きだされたものである。傍線 a、b は表現が異なるが、文意は同じである。波線部分は、全く異なる表現に変えて採り入れているところである。この「撰集抄」の波線部分、

のをとなりけん、しばしたゆれば、おちてみだる、うさと悲て、かりのやどに思を増、いとゞはかなき愛着にぞ侍るべき。たま／＼人界の生をうけて、難遭妙法にあくまでむつれ奉る時、十二因縁流転環をきり、廿五有生死のきつなを、くり果給べし。

さて、今生物憂てはせ過て、悪趣におもむきなば、億劫にもあがりかたかるべし。昔五戒十善の力により侍りて、悪趣のちまたを離れ侍りて、又、人界へ来たりとも、法燈末に望て、風にほのめく時ならば、長夜の闇をも、照す事かたかるべし。法水終て此所に帰ば、生死海の舟をよそへずしてこそ、又、悪趣へおもむき侍らんずらめと、悲覚え侍り。(……以下続)

とはぬまを、うらむらさきの藤の花、何とて松にかゝりそめけるぞと

は、「詞花和歌集」の257俊子内親王大進の歌

ひさしくをとせぬおとにつかはしける

とはぬまをうらむらさきにさく藤の何とてまつにかゝりそめけむ

を基とし、又

あふことや泪の玉のをとなりけん、しばしたゆれば、おちてみだる、うさと悲て

は「詞花和歌集」の252平兼盛の歌（他本・三奏本は平公誠となっていて、公誠が正しいとする）

あふことや涙の玉の緒なるらんしばし絶ゆれば落ちてみだるる

をふまえた表現である。^(注7)「榻鳴暁筆」ではその部分を

わかる、を歎き、鳥かねのこゑをかこち

とし、あえて和歌をふまえた表現は採り入れず、その表現の意図するところのみを簡略に記している。点線部分は「撰集抄」の表現をふまえた、「法灯青嵐」、「法水白波」と文意をまとめ、簡略にしている。とはいえ、全体を通して、この「撰集抄」の「越後上村見」の評部分に沿う形で忠実に採っていることがわかる。又、「別記文」は「法華経」の「薬王菩薩本事品」をふまえ、「撰集抄」の表現は用いておらず、一応独自の文と思われる。しかし「撰集抄」に拠っている箇所¹の文意の強調、或いは追補という形で、これも「撰集抄」の影響を多分に受けているといえるだろう。

この例も、評の大部分を、「撰集抄」に拠りつつまとめており、そのまとめ方―典拠から引いた文の前後に独自の文を加えてまとめる―も前の例と同様である。又、この「撰集抄」の「越後上村見」の説話も、少しの命を長らえるために老いも若きも人の心をだまして人・馬までも売買する様子を嘆く話で、世の無常を歎く「榻鳴暁筆」の「阿育大王」の話と趣旨を同じくしており、これも、趣旨を同じくする話の評の部分²をうまく採り込んでいるといえる。

3、卷二・第一「一切施王」

次に、表現も類似するが、構成まで採りこんでいる例を見る。卷二・第一「一切施王」の「別記文」の部分と『撰集抄』卷一・第二「祇園示現 御歌」の評の部分との比較である。「一切施王」の「本文」の原典は頭注では「薩和達王布施讓國 後還為王」三（経律異相二六）としている。但し「六度集経」二にも、同様な話があり、又、雪山童子の説話と話形が類似する。

この話は、「一切施王」という、三宝を敬い、布施をよくする王の話である。内容を要約すると、この王は、隣国の王（本文中で怨王とする）が攻めてくるときに、人々のことを考え、自ら位を退き山林に入るが、怨王は何とかこの王を殺そうとし、賞金を懸ける。王は、山で出会った婆羅門に金銭を与えるため、婆羅門と一緒に怨王のもとに赴き、自分が山林にいるのは死を怖れるためではなく、臣民の為であり、我が身を怨王に任せるところを述べる。その行動に感動した怨王は、改心して位を返し、教えを請うという話である。『撰集抄』の「祇園示現 御歌」の話は、親の財産をとられた人が、祇園の大明神の御託宣を聞いて発心し、庵を作って念仏に励む。それを知った財を横領した人が、（この念仏に励む男の）妻子にその財を返し、罪を悔い改心し、同じ庵で念仏に励み、同じ日に二人そろって往生したという話で、今までの例と同様に両話は全く別の説話ながら、趣旨を同じくしている。

さて、比較すると、「一切施王」では、「予今……」と語り手の一人称の形をとり、いかにも自らの感想を述べているようだが、『撰集抄』の「祇園示現 御歌」の表現と同文である。（二重傍線箇所）

【楊鳴曉筆】卷二・第一「一切施王」

①予今此事を聞奉るに、そゞろに涙所せきまで侍り。此世のならひを思ふに、さまでなき事さへ、人にはまけじとよるひるひまをうかゞひ、心にこゝろをつくし、思ひに思ひをかさね、敵をのみなさんと此世空しく来世いたづらに成はてぬるは、人の世のならひぞかし。

②いはんやこれは捨がたき十善万乗の御位をすて、はなれがたき九嬪百官のしたしきをはなれ臣民をあはれみ、山林に入給し御めぐみだに、かへりて婆羅門の為に御身を捨給ひし御事は、たとひ筆の海はつくるとも、志は一滴ものべがたし。又怨王の悔返し給ひし、猶たけ有て貴侍れ。か、敵などの山林にも逃入、又はからめとられても来なば、うれしくてますく罪にも行なはるべきに、ことはりにまけ、おもひ返し給はん事は、是又とかく申に、ことの葉なし。

【撰集抄】卷一・第二「祇園示現御歌」

①此事を聞に、そゞろに涙所せきまで侍り。如此よしなく人にさまざまをなさる、には、かなはぬまでも、夜ひる隙を伺て、すゞろに心をつくし、神仏に詣ても、あしかれとのみ祈て、いとゞおもひに思を重ね、ますく嘆に嘆をそへて、此世むなしく、来世いたづらに成はてぬるは、世中の人なるぞかし。

②しかるに、此聖の、神のみことのをげにと、ふかく思入て、悲しふおほえしおんな、いとをしかりし子をふり捨て、桑門の類と成給けん。すべて難有には侍らずや。我ごときのもの、いまの示現を蒙り侍りたらんには、「先申所をばかなへ給はで、あはれ道心の歌、何ともおほえず」と神をそしり申とも、よも此世をば振捨じと、いとゞ口惜く侍り。又、押取けん人の発心は、なをたけ有て貴く侍り。さ様の敵などの出家遁世せんは、いとゞうれしくて、ますく財宝にこそつながらるべきに、浅増と思ひて、一いほりに行て、後世のつとをたくはへ給けん事、筆にもものべがたく侍り。

③印度もろこし我朝に、つらく昔の跡を訪ひ、憂事に逢て世をのがる、はおほく侍れども、よろこびありて身を捨し人をば、いまだきかず。誠にこれよりは久遠正覚の如来のかりにちりにまじはり給ふらんと、かたじけなく貴くも侍り。

③印度、もろこし、我朝に、つらく昔の迹を訪に、うき事にあひてのがる、類は多く侍れども、未聞、よろこび有て世を捨とは。されば往生の素懐をとげ給も理也。和光利物の御めぐみ、返もかたじけなく侍り。「本躰盧舎那、久遠成正覚、為度衆生故、示現大明神」是也。久遠正覚の如来、雜類同塵し給らん、殊にかたじけなく侍りけり。

三つの段落に分けてみていきたい。①は、ほぼ同文であるが、『撰集抄』の「祇園示現 御歌」の波線部分は、採っていない。この波線部分①は、「祇園示現 御歌」の説話の具体的な行動をさしており、「一切施王」の話には不適切なため、あえて、採り入れなかつたと思われる。傍線部分は、表現を変えている箇所、これも説話にあう形に変えて採り入れている。説話と矛盾しないような採り込み方をしている。

②は、全く異なる部分である。「祇園示現 御歌」では、説話部分の一つ一つの具体的な行動に対する評となつている。まず、財産を取られた男の心映えと発心を称讚し、その後、「又、押取けん人の発心は……」として、改心し、発心した男を一層立派だと誉め讃えている。ここは、説話の内容と切に関わる為、そのままを採り入れることができなかつたのであろう。さて、「一切施王」での内容をみると、自らの「本文」に即して、『撰集抄』の「祇園示現 御歌」と同じ方法で、「本文」部分の評をしていることがわかる。「祇園示現 御歌」と同じく、まず先に、布施をよくし、臣民の為に自ら位を退いた、「一切施王」の素晴らしさ、心の貴さを称讚し、その後で、「又、怨王の悔返し給ひし……」と、怨王の改心をますますもって貴いと称讚する。「祇園示現 御歌」と、同じ方法をもつて説話の具体的な評、解釈とし、又、改心した方を称讚する理由も、

さ様の敵などの出家遁世せんは、いとうれしくて、ますく財宝にこそつながるべきに（『祇園示現 御歌』）
又はからめとられても来なば、うれしくてますく罪をも行はなるべきに（『一切施王』）

と、依拠しているといえる。表現を内容にあわせてかえつつも、評の方法として、依拠している。

③は、要約しつつ、ほぼ同文で採り入れている。但し、波線部分②は、「一切施王」には、みられない。この和光利物の御めぐみ、返もかたじけなく侍り。「本躰盧舎那、久遠成正覺、為度衆生故、示現大明神」是也。は、『諸経伽陀要文集』下に

本体盧舎那 久遠成正覺 為度衆生故 示現大明神

とあり、又、『法華経』の「如来寿量品第十六」に

為度衆生故 方便現涅槃 而實不滅度 常住此說法

と、よく見られる偈で、『神道集』五や『源平盛衰記』卷九、『本朝神仙伝』四「泰澄」にも類似の表現が見られる。^{（注）}しかし、『撰集抄』の「祇園示現 御歌」での「生あるものの救済のために、大明神となつて姿を現して救済する」という意は、この「楊鳴曉筆」の「一切施王」では「毘沙門」が変化しており、まとめとしてそぐわない為、引用できなかったと思われる。典拠をうまく使いつつ、矛盾がないようにあわせてまとめている。

又、ここでは、表現の依拠にとどまらず、「別記文」の構成まで、まず①の部分で、説話全体に対する感想を述べ、次に②の部分で、本文に対する具体的な評・解釈を述べ、最後に③の部分で、まとめ・教訓・全体の評を述べる『撰集抄』の「祇園示現 御歌」の評の構成方法に拠っているといえよう。

4、卷三「一切持太子」

次に、『撰集抄』の二つの話の評の部分の典拠としている例を見ていきたい。卷三「一切持太子」の例で、これも、『撰

集抄』を引いているのは「別記文」の箇所である。この「一切持太子」の「本文」の部分は、典拠とまではいえないが、『三宝絵』上・十二「須太那太子」、『宝物集』巻六と内容が類似する。『榻嶋暁筆』では「一切持太子」としているが、これは Sūdāna の訳で、よく布施をする人の意で、音写では「須太那太子」、須達拏、蘇達拏、訳では「善施」、^(注9)「善与」とも訳される。『太平記』巻三十三「三上皇自芳野音出事」では「善施太子」とする。

「一切持太子」は、何でも布施をする太子の話である。自ら深山に入り、ついには我が子までも布施にさし出す。帝釈が太子の心を試すため、婆羅門の姿となり、妻と（太子の）眼を乞うたとき、すぐに布施を承諾する。帝釈は姿を現し、布施にさし出された妻、眼を太子にあづける形で太子に返し、太子が菩提を成じるであろうことを予言しながら去るという内容である。

この「別記文」の箇所が『撰集抄』巻四・第二「良縁僧正」の評の部分と、巻一・第七「新院御墓」の評の部分とが典拠となる。説話の内容を確認しておく、「良縁僧正」の話は、「良縁」が出家するいきさつの話で、「良縁」は捨て子であったが富家の大邸に育てられ、中將にまでなっていた。しかし、ある時、訪ねてきた僧から手紙を渡される。そしてそれには、その僧が実父であること、また、その僧は妻の死をきっかけに最近出家したばかりのこと、そして中將に母の後世を弔うよう勧めするため、この手紙を書いたことが記してあった。中將はそれを見て、妻子にも別れを告げず、出家して「良縁」と名乗り、僧正にまでなったというものである。そして、「一切持太子」の「別記文」は大部分をこの話の評に拠っている。「新院御墓」に拠っているのは一部分である。拠っている箇所は崇徳上皇の御陵をみての述懐の箇所である。

『榻嶋暁筆』・巻三「一切持太子」

①此事菩薩本縁經にとかれたり。見奉るにつけてをろかなる心にも哀さ貴さやる方なし。此世の中を思ふに、たま

『撰集抄』巻四・第二「良縁僧正」

①此事、おろかなる心にも、哀さ身にしみてやる方なく侍り。人の習、我身世に有て、父母の後世を訪ひ、功德をも

く無常のことはりをば思ひ出るやうなれども、昨日とす
ぎ、けふとくれ、稀に生死のはかなさをばしるといへども、
ことの葉計にてとしを送り月をむかへしに、

②さても此君の清涼紫宸の間にして百官にいつかれ、後宮
前殿のうてなに三千の宮女にいつきかしづかれ、万機の政
を掌に握り、春は花の宴を專にし、秋は月の興にたはぶれ
させ給べき御身の、榮花の程をひるがへし、

③やすくもやつれ給へる墨染のもすそに、道芝の露はらひ
かねつ、たどりあるき玉ひけん御心のうち、たとへてもい
はん方なし。それにむつまじかりし御父は、うへにも御い
とまをも申させ給はず、命にかへがたかりし妻子をも施し
給ける貴さをば、いかでか三世の仏たちも見すてさせたま
ふべきとおほへ侍ければ、猶貫し。

造らむなどこそ思ふめるに、更、行末いとゞさかふべき榮
華の藤の華を思捨て、

『撰集抄』卷一・第七「新院御墓」

②清冷、紫宸の間にやすみし給て、百官にいつかれさせ給
後宮後房のうてなには、三千の美翠のかんざしあざやかに
て、御まなじりにか、らんとのみしあはせ給しぞかし。万
機の政を、掌ににぎらせ給ふのみにあらず、春は花の宴を
專にし、秋は月の前の興つきせず侍りき。……

③やすくもやつれ給へる墨染の袂に、道しばの露払つ、た
どりありき給けん心の中の貴さをば、争三世の仏達のみす
ごさせ給べきと覺侍り。(……以下続)

①、③とは、『撰集抄』の「良縁僧正」に拠っている。『楊鳴曉筆』の「一切持太子」では、初めに「本文」の出典を明
記する独自の一文（網かけ部分A）を付す。そして、「をろかなる心にも哀さ貴さやる方なし」と「良縁僧正」の表現を
引く。しかし、その後の傍線部分は、『撰集抄』

人の習、我身世に有て、父母の後世を訪ひ、功德をも造らむなどこそ思ふめるに、更、行末いとゞさかふべき榮華の

藤の華を思捨て

に対し、「榻鳴暁筆」

此世の中を思ふに、たま／＼無常のことはりをば思ひ出るやうなれども、昨日とすぎ、けふとくれ、稀に生死のはかなさをばしるといへども、ことの葉計にてしを送り月をむかへしに、

と全く異なる。これは、「撰集抄」の「良縁僧正」の表現が、説話に密接に関わり、「父母の後世を訪う」や「良縁」が藤原氏に育てられ、中将にまでなったことを示唆し、藤原氏の栄華を示す「栄華の藤の華」の語など、「良縁」の行動に対する具体的な評となつていて、採り入れることができなかつた為と思われる。しかし、③の部分でも、また「良縁僧正」の評の部分から引いており、この部分も少ないが「良縁僧正」に拠っていると思われる。

②は、「撰集抄」の「新院御墓」の述懐部分、上皇が政を行なつていた頃の華やかさを、「榻鳴暁筆」は太子の出家しなければありえた恵まれた状況にみためて描いている。この表現は、「白氏文集」卷十一・感傷の「長恨歌」^(注10)

承歡侍宴無專夜 春從春遊夜專夜

後宮佳麗三千人 三千寵愛在一身

が基で、類似する表現は他の作品でも多い。但し「清涼紫宸の間」、「百官」、「三千」、「万機の政を掌に握り」などの並び方が同じなのは、このみである。「榻鳴暁筆」では、「本文」に合わせて、「二重傍線部分」、「撰集抄」で「三千の美翠のかんざし……」と三千人の美女の形容をしている箇所を、「三千の宮女にいつさかかずかれ……」(「榻鳴暁筆」)と変え、波線部分の、院の寵愛を受けようと、美女たちが争つたりする表現は避けるなど、「撰集抄」に拠りながらも、表現を選んでる。

③は「榻鳴暁筆」の方が典拠よりも長文となつている。(「榻鳴暁筆」の)点線部分は独自に付け加えている部分で、「妻子をも施す」など、「本文」に合わせて太子の具体的な行動をあげて解釈している。典拠を用いながらも、「本文」に合うように編集し直しているといえる。一つの「別記文」の中で同じ作品中でも巻の離れた箇所を典拠とするが、これと同じ

様な現象は他にも見られる。たとえば『榻嶋暁筆』巻二の第十「夏禹王」の「本文」部分は、前半を『三国伝記』の巻七・第十一、後半を巻一・第五に拠っている。「本文」中の割注では、「史記に云……」と記してあるが、『三国伝記』と文体自体も類似していることから、典拠は『三国伝記』でまちがいないだろう。「本文」の箇所では何故、巻の異なる箇所から引くのかを考えなければならないが、今回は、巻の離れた箇所から引いている例があることのみを指摘したい。^(注1)

四、巻九「瞻西上人化女」について

ここでは、『撰集抄』の説話部分をも引いている例（『榻嶋暁筆』中一例のみ）を取りあげる。この説話は、安田氏が、『撰集抄』巻三・第七話「瞻西上人化女」から「概略意を取り記述したと考えられる」と述べられているとおり、『榻嶋暁筆』の「瞻西上人化女」は要約しつつも、『撰集抄』の大部分と同文である。『榻嶋暁筆』では、この話に関する評は「本文」で触れられておらず、『榻嶋暁筆』では、施しを要求する女が、文殊であると正体がわかるところで終わっている。実は『撰集抄』では、文殊であろうとするところは話末評との境の部分であるが、おそらく『榻嶋暁筆』では、話の結論―この化女が実は文殊であること―を明確化したい為、話末評の部分で触れられる話の核を、「本文」に取り入れた^(注2)と思われる。

さて、『榻嶋暁筆』では、次に六「漢土齋会化女」として、貧女が実は「大聖文殊」であったとする同様の趣旨の話が続く。『榻嶋暁筆』のこの巻は「似類下」の巻で、二話、三話一類となり、それを区切る形でまとめとして、「別記文」があることが多い。ちょうど、「別記文」が区切りの働きをする顕著な巻であるが、ここも、この「漢土齋会化女」のあと、この両話のまとめとした「別記文」がある。まとめであるので、「本文」の解釈だが、その箇所も『撰集抄』巻三・第七「瞻西上人化女」の話末評の部分を基としている。

私云、是はあがれる世にして、又もろこしなどの事なれば、
 さも侍りなん。瞻西上人の化女に逢給へりしこそ、返々も
 あやしくも、又はたうとくも侍れ。聖の心の露ばかりもけ
 がれざりければこそすめる月の空くもりするあやまりも侍
 けめ。げにかなしき我ら哉。たゞ朝夕は嬰兒のこことくして、
 月日を送り、老の波にたゞよひ、よはひのすゑの落によす
 れば、夢にくだかれ、をのれのみ生死の海に帰らん事的心
 うきは、更にかき述べくも侍らず。

……………かやうの事などは、世あがりて書をくあと多く侍れ
 ども、すゑの世にはためしまれなるべし。されば、いづれ
 の仏菩薩来て、女の姿と見えて心をはかり給ひけん、ゆ
 かしく覚えて侍り。但、彼聖人は「文殊の化し給へるにや」
 と、の給はせければ、いかなるしるしの侍りけるやらん。
 聖の心の露ばかりもけがれざりければこそ、すめる月の空
 くもりするあやまりも侍りけめと、返々ゆかしくおほえ
 て侍るぞや。
 げに悲しき我等哉。心一のしづまり入で、引結ぶ太山の
 草の庵にあと、めがたくて、只はかなき嬰兒の遊の如して、
 空く月日過行て、老の波路にたゞよひ侍りて、なぎさに奇
 すれば岩ほにくだかれて、をのれのみ生死海に帰る事的心
 憂さよ。さて又、仏菩薩の御心に背ければ、御ことのを
 も聞ざるまゝに、弥々くらきよりくらきにまどひて、むね
 の月には心もかけざるうさは、更にかき述べくも侍らず。

比較すると、「榻嶋晚筆」は「撰集抄」の二重傍線の部分①②③④を中心にしており、「撰集抄」の表現をつなぎ合
 せた形になっていることがわかる。(点線で囲んだ「空しく」、「遊の」の語は、「榻嶋晚筆」にはない語、一重傍線で囲ん

だ所は、表現が異なる語である。」「私云……」と、先の『楊鳴曉筆』の「一切施王」の「予云……」と同じく、語り手が一人称の形を取り、いかにも独自の解釈の風を装うが、初めの部分も、「あがれる世」など、『撰集抄』を参考にし、又、「聖の心……」からはつなぎあわせる形で採っていて、典故があるものとわかる。

『楊鳴曉筆』の「本文」が『撰集抄』の一話を基としていたため、「別記文」が、それと同じ『撰集抄』の一話に拠るのは当然ではあるが、同じ一話から採っているにも関わらず、このように説話部分（「本文」と評の部分（「別記文」と形式を違えて明確にかき分けていることは、注目すべき点といえる。この書き分けからも『楊鳴曉筆』が、いかに評と説話の区別にこだわったかがわかる。また、「別記」の形式を取り入れることも、この評を重視する姿勢と関わるだろう。

五、まとめ

以上、『撰集抄』を典故とした箇所を、その受容の方法別に見てきた。『楊鳴曉筆』は（今回はとくに「別記文」の例、本文の解釈・感想となつている箇所が多い）、『撰集抄』の全く別の説話の中から、『楊鳴曉筆』の「本文」と趣旨を同じくする説話を探しだし、その評を採り入れ、その「本文」の解釈としている。そして、大部分を典故によりながらも、独自の文を加えたり、「本文」に沿うように手を加えるなどして、「本文」と矛盾しないように、編集している。美文の表現を採り入れ、時には、教訓までも、又構成までも拠っているものの、それらの評を従来とは異なる説話と組み合わせることで、新しい一説話を生み出していることは、注目すべき点である。

又、説話評論ともいわれる『撰集抄』から、説話部分ではなく、「評」の部分を多く引き、その大部分を「別記文」に採り入れている。『楊鳴曉筆』が別記の形式を用いることと、評にこだわることは無関係ではないと思われる。

〈注〉

(1) 『楊鳴曉筆』 中世の文学・三弥井書店・市古貞次氏の解説による。

(2) 拙稿「『楊鳴曉筆』の世界―へ別記」の形式をめぐって―(『愛知淑徳大学国語国文』25 平成十四年三月)

(3) 管見に入った諸本は二十三巻本一国会図書館本・内閣文庫本・鈴鹿文庫本・京大本(文学部図書館蔵)

二十巻本一神宮文庫本・京大本(二種類) 楊鳴曉筆抄一国会図書館本・神宮文庫本・陽明文庫本

(4) 『楊鳴曉筆』のテクストは前述 市古貞次氏校注 中世の文学(三弥井書店)による。『撰集抄』のテクストは、古典文庫(現代思潮社) 安田孝子氏・梅野きみ子氏・野崎典子氏・河野啓子氏・森瀬代士枝氏校注による。

(5) テクストが底本としている国会図書館蔵・二十三巻本は「今世後世為律侶」とするが、これはあきらかに誤字で「今世後世為伴侶」の誤りであると思われる。よってここでは「伴侶」として扱う。又、テクストの頭注にもあるように宮内庁書陵部蔵・二十三巻本、東京大学国文学研究室蔵・二十三巻本では「伴侶」となっている。

(6) 「臨命終時不隨身」・「臨命終時不隨者」の違いについては安田孝子氏の論文、又、松村恒氏「妻子珍宝及王位」の偈をめぐって(『印度佛教學研究第五十巻第二号・平成十四年三月』)に詳しい。

(7) 「詞花和歌集」のテクストは「金葉和歌集 詞花和歌集」新日本文学大系(岩波書店)による。又、「詞花和歌集全釈」(笠間注釈叢刊10)菅根順之氏校注 昭和五十八年 初版発行 笠間書院を参照した。又、典拠については、安田孝子氏「撰集抄」における他所との関連(『説話文学の研究 撰集抄・唐物語・沙石集』和泉書院・一九九七年二月)、「撰集抄注釈」安田孝子氏・梅野きみ子氏・野崎典子氏・河野啓子氏・森瀬代士枝氏注に指摘がある。

(8) 「諸経伽陀要文集」のテクストは「金沢文庫資料全書 巻七巻 歌謡・声明篇」昭和五十九年三月二十日発行・便利堂、「法華経」のテクストは「法華経(下)」坂本幸男氏・岸本裕氏釈注・岩波文庫による。又、典拠については(7)に同じ。

(9) 「総合仏教大辞典」一九八八年一月第一版・宝蔵館、「印度仏教固有名詞辞典」赤沼智善編・宝蔵館

(10) 「長恨歌」のテクストは「白楽天全詩集 第二巻」(統国訳漢文大成)昭和五十三年七月発行 誠進社

(11) 特に「楊鳴曉筆」巻二・三は、「三國伝記」が出典のものが多く、ほぼ同文に近い形で引いている。但し、「太平記」からも同文に近い形で引いており、同文に近い形で引くものは「三國伝記」以外にも多い。

(12) 「楊鳴晚筆」の「瞻西上人化女」は、諸本によってあるものとなないものがあり、安田氏は、後補かとする。ちなみに、管見に入つた諸本のうち、抄本には、全てあるものの、二十三巻本や二十巻本ではみられない。但し、内閣文庫本（二十三巻本）にはある。「別記文」も同様である。又、「瞻西上人化女」には、説話番号が付されていない。

(博士後期課程二年)